

令和5年産水稻の作況調査結果と当面の技術対策

技術支援課
(普及指導室)

生育ステージ	<p>早期：収穫終了 早植：収穫期～収穫終了 普通期：成熟期～収穫期</p>
生育概況	<p>早期：「コシヒカリ」の成熟期は平年並～4日程度早まった。白未熟粒や胴割粒の発生で品質は平年より劣り、収量は不稔籾やくず米が多く、平年並～やや少ない。</p> <p>早植：「コシヒカリ」「ひとめぼれ」の成熟期は概ね平年より7～10日程度早まった。白未熟粒、胴割粒が平年よりも多く、等級は中山間地域で1～2等、平坦地域で2～3等中心となることが見込まれる。収量は平年並の見込み。</p> <p>普通期：「あさひの夢」の成熟期は地域差が見られるが、概ね平年より7～10日程度早まった。白未熟粒等による品質低下が見られるが、早植栽培よりも被害は少ない。収量は平年並の見込み。</p>

1 気象経過 (前橋地方気象台の気象データ、10月は第3半旬までのデータ、参考資料参照)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
気温(平年差)	+1.8℃	+0.5℃	+1.2℃	+2.9℃	+2.6℃	+3.7℃	-0.4℃
降水量(平年比)	53%	106%	184%	41%	65%	97%	110%
日照時間(平年比)	115%	110%	111%	159%	124%	118%	122%

2 生育概況

(1) 概要

ア 早期・早植栽培 (6月15日以前の田植)

早期栽培「コシヒカリ」の成熟期は平年並～4日程度早まった。出穂後の高温等の影響で白未熟粒や胴割粒等が見られ品質は等が多く、平年より劣る。収量は平年並～やや少ない。

早植栽培「コシヒカリ」「ひとめぼれ」の成熟期は平年より7～10日程度早く、「あさひの夢」の成熟期は地域差があり、平年より2～8日程度早まった。穂数は平年並に確保され、やや少ない傾向だった北部でも穂重が確保され、収量は平年並の見込みである。品質は白未熟粒や胴割粒の発生で平年より劣る。等級は中山間地域で1～2等、平坦地域で2～3等が中心となる見込み。

イ 普通期栽培 (6月16日以降の田植)

普通期「あさひの夢」の成熟期は地域差が見られるが、概ね平年より7～10日程度早まった。品質は白未熟粒の発生で平年より劣る見込みだが、早植栽培よりも被害程度は低い。「コシヒカリ」「ひとめぼれ」では、白未熟粒、胴割粒の発生が「あさひの夢」よりもやや多い。穂数は平年並に確保されており、収量は平年並の見込み。

(2) 病虫害・障害等の発生状況

ア 早期・早植栽培

病虫害は紋枯病、内穎褐変病が多く、西部・東部地域の一部で斑点米カメムシ類が、北部・東部地域の一部でバッタ類、イナゴ等がやや多かった。中山間地中心に、いもち病、稲こうじ病が散見された。9月上旬以降の降雨で「コシヒカリ」「ひとめ

ぼれ」で倒伏が見られ、刈り遅れも発生した。高温の影響で白未熟粒（乳・心白粒、背白粒、基白粒）、胴割粒の発生が多い。

イ 普通期栽培

病害虫は紋枯病、内穎褐変病が多く、平坦地域の「あさひの夢」「群馬糯5号」でもみ枯細菌病がやや多い。高温の影響で白未熟粒（乳・心白粒、背白粒、基白粒）、胴割粒の発生が多い。

(3) 作況ほ等の調査結果等

ア 作況ほの調査結果（表1参照）

県平均の出穂期は8月14日（平均比-2日）であった。出穂後30日の穂重は751g/m²（同110%）であった。早期・早植栽培の成熟期は9月14日（同-7日）、普通期栽培の成熟期は10月5日（同-10日）であった。

イ 農業技術センターの生育基本調査結果

(ア) 稲麦研究センター（6月23日移植）

「ゆめまつり」の出穂期は8月26日（過去10カ年平均比-4日）、成熟期は10月10日（同-8日）、稈長は81cm（同101%）、穂長は21.4cm（同101%）、穂数は399本/m²（同99%）、m²玄米重は623g/m²（同99%）であった。

(イ) 東部地域研究センター（6月1日移植）

「ゆめまつり」の出穂期は8月18日（過去11カ年平均比-1日）、成熟期は9月24日（同-10日）、稈長は72cm（同93%）、穂長は21.1cm（同102%）、穂数は352本/m²（同92%）、m²玄米重は450g/m²（同81%）であった。

表1 水稻作況ほ調査結果（地域別・作期別）（）内は平年比

調査項目 地区	移植期 月/日	出穂期 月日	出穂後15日		出穂後30日 穂重 g/m ²	成熟期	
			穂数/m ²	粒数/m ²		か所	月日
県	6/9(0)	8/14(-2)	387(105)	31,159(103)	751(110)	14/15	9/19(-8)
中部	6/15(0)	8/17(-3)	386(103)	32,251(104)	718(109)	4/4	9/14(-11)
西部	6/8(-3)	8/13(-4)	398(105)	33,105(100)	820(112)	4/4	9/22(-10)
北部	5/22(+2)	8/3(-3)	387(96)	25,709(93)	648(94)	4/4	9/18(-6)
東部	6/10(+2)	8/14(-1)	383(109)	30,774(108)	767(115)	2/3	9/22(-6)
早期・早植	5/28(+1)	8/4(-3)	400(103)	28,385(100)	690(103)	9/10	9/14(-7)
普通期	6/21(-1)	8/25(-3)	371(101)	34,068(101)	813(112)	5/5	10/5(-10)

- 注1) 県の平均値は加重平均（データが揃っていない場合は算術平均）、地区、作期別の平均値は算術平均とした。
 2) 移植期欄の（）内の「-」は早い、「+」は遅いを示す。
 3) か所数欄は「調査か所/設置か所数」を示す。
 4) 早期・早植：6月15日以前の田植。普通期：6月16日以降の田植。
 5) 館林市は移植時期が大幅に遅れ、ほ場が変更となったため、県、地区、作型平均から除外した。

(4) 作柄のまとめ（表2）

各地域の作柄は「並」であり、県全体では「並」が見込まれる。

表2 地帯別作柄概況（）内は普及指導課・地区農業指導センター

地域別	作柄	作柄概況
中部 (中部) (渋川)	並	・早植栽培：収穫終期。成熟期は平年より7~10日程度早まった。共乾施設稼働も1週間程度早まったが、降雨により収穫作業に遅れが生じ、刈り遅れが生じている(中部)。品質は白未熟・胴割粒により2~3等(中部)、3等(渋川)が中心。

(伊勢崎)		<ul style="list-style-type: none"> 普通期栽培：成熟期～収穫期。成熟期は平年より 7～10 日程度早まった。白未熟粒により品質は平年より劣るが、「あさひの夢」では早植ほど低下しない見込み（中部）。「コシヒカリ」では 3 等中心の見込み（伊勢崎）。 病害虫は、紋枯病が多く、内穎褐変病、斑点米カメムシ類は平年並。いもち病（渋川）も散見。一部でもみ枯細菌病がやや多い（伊勢崎）。「コシヒカリ」「ひとめぼれ」中心に倒伏が並～やや多い。
西部 (西部) (藤岡) (富岡)	並	<ul style="list-style-type: none"> 早植栽培：収穫終了。成熟期は平年より 5～7 日程度早まったが、降雨の影響で刈り遅れ傾向となった。7 月末～8 月上旬の少雨で青立ちとなったほ場では収量が劣るが（富岡）、収量は平年並、白未熟粒や斑点米により品質は「コシヒカリ」で 2～3 等、「あさひの夢」で 3 等が中心となる見込み（西部）。 普通期栽培：成熟期～収穫期。成熟期は平年より 7～10 日程度早まった（西部・藤岡）。収量は「コシヒカリ」「ひとめぼれ」で平年並～やや少なく、「あさひの夢」で平年並。品質は白未熟粒の発生で 3 等中心の見込み（西部）で、「ひとめぼれ」では早植よりも品質低下が見られている（富岡）。 病害虫は、紋枯病、内穎褐変病が多く、一部でもみ枯細菌病（藤岡）、いもち病（富岡）が見られ、中山間で斑点米カメムシ類（西部、富岡）、早植地域一部でバッタ類（西部）が多い。倒伏が散見される。
北部 (吾妻) (利根 沼田)	並	<ul style="list-style-type: none"> 早植栽培：収穫終期。成熟期は平年より 5～9 日程度早まったが、降雨の影響で一部刈り遅れが生じている。用水不足となったほ場で穂数がやや少ないが、くず米、青未熟は例年よりも少なく、収量は平年並（利根沼田では並～やや多）を見込む。品質は白未熟粒、胴割粒の発生で例年よりもやや劣り 1～2 等が中心。病害虫は紋枯病（利根沼田）、内穎褐変病、バッタ・イナゴ類（吾妻）が多く、稲こじ病（吾妻）が散見。
東部 (東部) (桐生) (館林)	並	<ul style="list-style-type: none"> 早期栽培：収穫終了。成熟期は平年並～4 日程度早まった。高温による白未熟粒が多いため品質は平年より劣り不稔粒、くず米がやや多いため収量は平年並～やや少ない（館林）。 早植栽培：収穫期～収穫終了。成熟期は地域差があり、館林で平年並～2 日程度早まり、東部、桐生地域では平年より 7～10 日程度早まった。降雨の影響で刈り遅れが見られた（桐生、館林）。収量は平年並を見込むが、品質は白未熟粒等の発生で平年よりも劣り、平坦地域では 3 等中心となる見込み（東部）。「あさひの夢」では、一部で規格外の発生も懸念される（東部）。 普通期栽培：成熟期～収穫期。成熟期は地域差があり、館林で平年並、東部地域では平年より 8 日程度早まった。穂数が平年並で確保されているため、収量は平年並を見込むが、白未熟粒等の発生により、1 等比率は平年よりも低くなる見込み（東部）。降雨により刈り遅れ傾向となっている。 病害虫は、紋枯病、内穎褐変病、もみ枯細菌病が多く、不稔の発生も平年より多い。バッタ類（桐生）、カメムシ類、イナゴ類（館林）もやや多く見られた。

3 技術対策

- (1) 本年は生育が早まっているため、登熟や気象状況に留意し、刈り遅れのないよう収穫を行う。
- (2) 倒伏した場合は、速やかに排水し、成熟状況を見て早めに収穫する。収穫期に穂発芽等が認められる部分は可能な限り別収穫とし、品質低下を防止する。
- (3) 自脱型コンバインによる収穫作業は、籾の損傷軽減や作業能率向上のため、朝露が消えてから開始する。脱穀籾は含水量が高く変質しやすいので速やかに乾燥に移す。
- (4) 乾燥については、過乾燥・急速乾燥に留意して、乾燥機の毎時乾減率は 0.8%以下とし、籾水分 14.0～14.5%（玄米水分 14.5～15.0%）に仕上げる。高水分籾の場合、急速乾燥は胴割粒を発生させるので、初期は通風のみで乾燥を行い、水分むらを解消してから穀温 40℃以下の低温で乾燥を行う。さらに籾水分 18%で一旦停止して半日程度貯留した後、再度乾燥を行うと胴割粒の発生をより抑制することができる。
- (5) 調製については、網目を 1.8mm 以上とし、整粒歩合 80%以上を目標に仕上げる。選別機の処理能力以上の粗玄米を流さないよう丁寧に行い、整粒の確保を図る。丁寧な調製を行い、可能であれば色彩選別機を活用する。
- (6) イネ蒴葉枯病対策および地球温暖化防止の観点から、収穫後は早めに耕起し、ひこばえを残さないようにするとともに、ワラの腐熟促進を図る。
- (7) 近年問題となっている種子伝染性病害（ばか苗病、いもち病、もみ枯細菌病等）対策

として次のことを徹底する。

ア 種子更新と比重選の実施

自家採種種子や登熟不良種子は保菌リスクが高くなるため、種子更新と比重選を行う。

イ 資材消毒、種子消毒の適正な実施

化学農薬による種子消毒では、薬液温度に留意し（10℃以下にしない）、粃と薬液の容量比（1:1以上）を守る。温湯消毒は微生物農薬との体系処理を行う。

ウ 作業場、育苗施設、本田周りの清掃

いもち病やばか苗病が発生したほ場の稲わら、粃がら、米ぬか等は感染源となるため、作業場、育苗や本田周りに放置しない。

エ 種子消毒・温湯消毒時、催芽～育苗時の温度管理の徹底

種子消毒や温湯消毒は適正な温度、時間で実施する。また、催芽、出芽時は28℃を超えないようにし、育苗期も高温に注意する。

- (8) いもち病や紋枯病が多発する年次が多いため、本病が問題となっている地域では令和6年産は本病に高い効果のある箱施用剤を広域的に使用する。本田で発病が見られる場合は、早急に防除を行う。
- (9) 農薬等の使用状況の記帳確認を行う。

《参考資料》

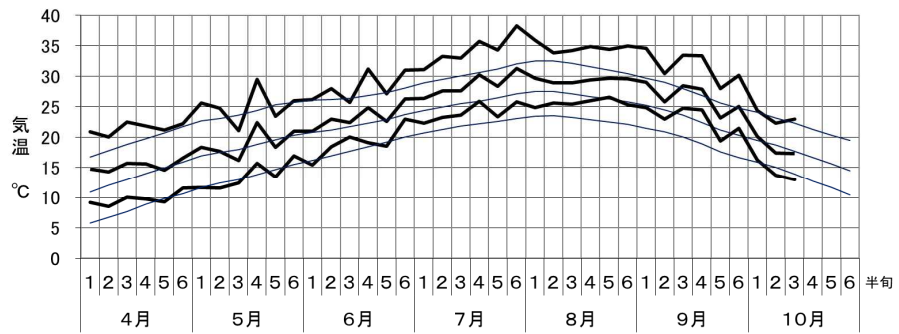


図1 気温

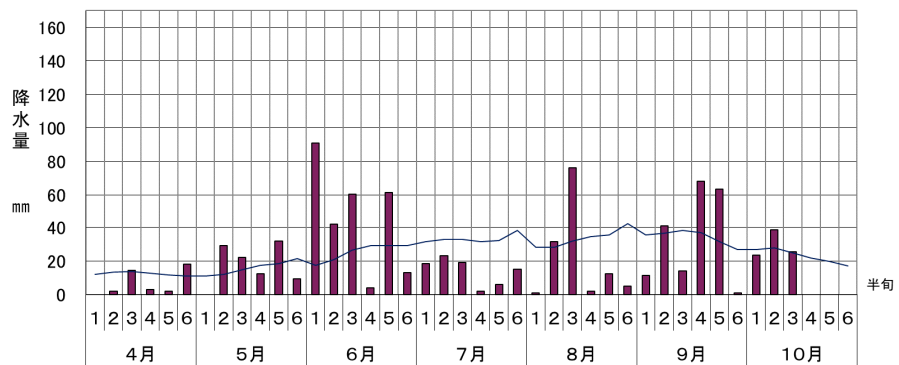


図2 降水量

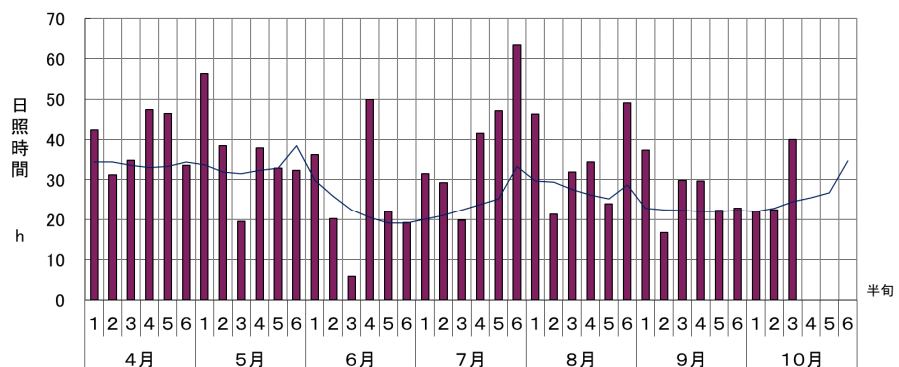


図3 日照時間